

大東文化歴史資料館だより

第11号 2011. 11. 30

歴史資料館へ資料の寄贈を！

大東文化歴史資料館運営委員 東京大学・桜美林大学名誉教授 寺崎 昌男

大学アーカイブス関係者は、みな必死の思いで学内・学外の資料を収集している。だが収集資料だけでなく、それと並んで、寄贈資料がなければ、アーカイブスの使命を果たすことはできない。大東文化歴史資料館にとっても事情は同じである。

授業料督促状のこと

東京大学百年史を編集していたころのことである。

「大正時代に卒業した祖父が授業料を納めていなかったと見えて、督促を受けたようです。手紙が残っているんですけど・・・」と電話がかかってきた。「ぜひ頂きたい。すぐ伺います」と答えて、北関東のある町を訪ねた。

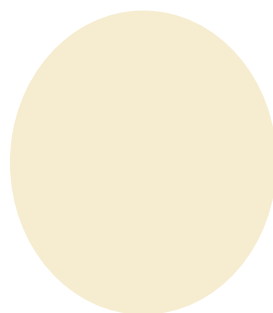
拝見すると、たしかに催促状だが、ハガキ一枚のものではない。「前略云々」に始まる丁寧な書状で、付録の文書まで付いている。その文書には当年度の学部毎の授業料額一覧も何十何円の単位まで載っている。同じ大学でも学部毎に学費が違ったことがよく分かる。他の刊本や法令からはなかなか掴めない情報である。貴重な資料として沿革史の中に活用することができた。

「危険な情報」も

国立大学に勤務していた知人から聞いた別の話もある。

元・事務局長が物故し、遺族から「行李2杯分の資料が残されている。大学関係のもののようなから寄贈したい」という連絡があった。早速出向くと、確かに貴重な文書ばかりで、もちろん譲り受けることにした。

持ち帰った文書を整理すると、故人の手帳が数冊あった。めくってみると、昭和40年代のある日のページにメモがある。学長・事務局長及び首脳部が開いた小会議の要点である。それは、ある部局を廃止してはどうかという、内密の会議のメモであった。しかも廃止されようとしていた部局は、他にもない調査に行った友人自身が属する組織のことだった。



知人も廃止の噂だけは聞いていたが「わが部局は本当に潰されそうになっていたのだ」と改めてはっきり知ることができた。廃止政策の発議者の一人による「この上ない記録資料」が手に入ったわけである。

「ご遺族にお礼しながら、もしこれが実現していたら・・・と震えたね」と知人は述懐していた。

「恐怖の記録」とはいえ、こういう根拠があれば、沿革史の中の部局動向に自信を持って記述することができる。失礼な予想ながら、もし記録者本人がお元気だったらとてもアーカイブスの手には入らなかったろう。「寄贈」がもたらした新知見である。

創設者の学位論文

寄贈を受けるというのは、一見、受身の行動に見える。だがその成果は、駆け回って資料集めをするのにまさる場合がある。

最近報告された成果の一つは、東洋大学の例である。開祖井上円了が日清戦争直後に帝国大学（後の東京帝国大学）へ提出した博士学位論文の下書きが、遺家族から寄贈されたという。

雑誌に掲載された写真版で見ると、下書きとはいえ見事な墨筆の浄書論文で、本人が加えた朱筆修正部分もはっきり分かる。いつ文科大学に提出され、どのように審査され、いつ文部省に廻ったかなどもすべて確かめられている（三浦節夫「井上円了の博士学位論文『仏教哲学系統論』について」、東洋大学井上円了記念学術センター『井上センター年報』第20巻、2011年9月刊）。

この論文は審査通過後遂に公刊されなかった。しかし今回、1世紀以上埋もれていた全貌が世に出た。

ちなみに、上の論文の完成経緯や審査経過がはっきりと分かるのは、東京大学の行政文書が大学史史料室を通じて公開されているからである。しかし何と言っても決定的なきっかけは、ご遺族が下書きを保存しておられていたこと、そしてそれをアーカイブス（東洋大学の場合は井上円了記念学術センター）に寄贈されたことである。

むすび

大東の校友の方々、大学や高校等の教職員・関係の方々、さらにそれらのご遺族の方々に特にお願いしたい。学園に関係ありと思われる資料があったら、分量にかかわらず、ぜひ歴史資料館にご一報を。それは日本の文化史・教育史に新世界を開いてくれるかも知れないのである。

<資料寄贈ご協力のお願い>

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園に関わる資料を広く収集しています。教科書・講義ノートのほか、写真・映像、機関紙・新聞など、ご提供いただけるものや情報がありましたら、お気軽にご連絡ください。ご協力を宜しくお願いいたします。

学生時代の思い出

昭和31年（1956）4月編入学した当時の大東大は、池袋西口から目白寄りに十五分ほど歩く距離にあり、細い道路にそってアーチ凹型に建った木造二階建ての校舎であった。学生数二八〇名の一学部（文政学部）三学科（日本文学科・中国文学科・清治経済学科）という小規模な学園であったが、志を抱いた地方出身の学生が集り、意気軒昂を感じていた。教育環境ではハードの面こそ貧弱であったが、多くの碩学に恵まれたお蔭で楽しく有意義な学生生活を過ごし得ていたと思っていた。

入学して間もなく、「川上の嘆」（『論語』子罕）と題した主任教授の高田真治先生の研究発表を聞き、その内容はほとんど忘れたが、結びの語に、「孔子はそれほど遠い人と感じなくなった」と云われ、深く印象づけられていた。先生は戦後間もなく東大を辞任され、数年を経て大東大に主任教授として来られていた。「中国哲学史」を担当され、宋学について講義し、主に二程子（程明道・程伊川の兄弟）、とりわけ程明道の学説を、常に原稿を用意されて主要な点を板書し、意を尽しての講義であった。その時のノートが卒業後、『伊洛淵源録』訳注を依頼されたときに役立っていたものである。また、先生から『詩経』集伝を一对一で教わっていた。先生の『詩経』の解釈は毛伝と鄭玄および朱熹の解説を折中されたいわゆる伝統的な立場で、江戸期からの説をも含めて詳細であった。先生が晩年、精魂を尽されて著わした高著『詩経』上・下（昭和43年、集英社刊）を利用させていただく度に当時を彷彿とさせているのである。なお、先生の学問については、濱久雄運営委員が本誌第8号（2010年5月31日発行）に略述されているのでご参照されたい。

白熱授業として異彩を放っていたのが加藤常賢先生の「文字学」講義であった。漢字最古の甲骨文や金文を駆使しながら、『説文』の説解の是非を検討して、各漢字の原始義（その漢字の最も古い意味）を解き明かすことであった。

先生の漢字学の根底には、実はすでに中国古代社会の研究があり、経学があった。その高著『支那古代家族制度研究』（昭和15年9月、岩波書店）からも充分うかがわれるものであったが、学生時代はその内容がなかなか難しく理解されずにいたものである。

講義のテキストは謄写版の講本で「感じノ起原」巻七であった。六十八頁に八十字ほど収められていた。学年末の課題は、巻七を丸ごと毛筆で和紙に書き写ることであった。理解して記憶に留めるには有効な手段だと思われていた。なお、講本は昭和24年から昭和43年までの間に巻十九冊作られていた。それに未刊の原稿のものを加えて、昭和45年（1970）に先生のライフワークの名著として角川書店から『漢字の起原』と題し出版されていた。掲載字数は二五三二字で、九九五頁の大部である。出版には、大東大の同窓、佐野正利氏が角川書店の編集長（後に角川書店代表取締役となる）で尽力されてできたものである。この書の序と簡明な解説、そして巻末の跋文を合わせ読むと、先生の「漢字学」の方法なり目的なりが理解できるようになっている。

浅学非才な私などは未だに漢字学習には、先生のこの学殖豊かな大著のお世話になっているのである。

紙幅の都合もあって今回は、両先生の学恩の一端を述べるに過ぎなかったが、大東大で過ごした学園生活は心から楽しく有意義な時代であったと回想しているのである。

（元明治大学教授・歴史資料館運営委員 進藤英幸）

大東アーカイブス 特別展

大東文化大学第一高等学校 創立50周年（2012年）プレ展示
「登山家 加藤保男と大東文化大学第一高等学校」展

展示期間：平成23年10月13日(木)～平成24年3月16日(金)
 (途中、1月10日より第二会期として展示品入替あり)
 開室時間 毎週月～金曜日 9:00～17:00
 展示場所：大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)
 主催：大東文化大学第一高等学校



大東文化歴史資料館展示室では現在、第一高等学校創立50周年企画「登山家 加藤保男と大東文化大学第一高等学校」を展示開催しています。大東文化大学第一高等学校の卒業生である加藤保男は厳冬期エベレストの単独登頂を果たすなど、登山家として数々の偉業を重ねたことで知られています。

卒業生の軌跡が貴重な資料とともに紹介されています。詳しくは第一高等学校までお問い合わせください。



【大東アーカイブス活動記録】(2011年4月～2011年9月)

- | | |
|---|---|
| 4. 15 企画展のため展示室入替作業 | 6. 25 自校史教育「現代の大学」⑥ |
| 4. 18 第11回企画展「受贈資料展 資料で見る大東文化学園史」
公開 | 6. 28 小原玲子氏宅にて小川平吉関係資料確認 |
| 4. 28 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会会議参加
(於：武蔵野美術大学) | 7. 2 自校史教育「現代の大学」⑦ |
| 5. 1 自校史教育「現代の大学」① | 7. 9 自校史教育「現代の大学」⑧ |
| 5. 12 川田清子氏より川田瑞穂関係資料受贈 | 7. 14 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会
(於：武蔵野美術大学) |
| 5. 21 自校史教育「現代の大学」② | 7. 16 自校史教育「現代の大学」⑨ |
| 6. 3 全国大学史資料協議会東日本部会総会参加
(於：女子美術大学) | 7. 19 淑徳大学より事業活動等調査のため来館 |
| 6. 4 自校史教育「現代の大学」③ | 7. 21 小原玲子氏来館、小川平吉関係資料受贈 |
| 6. 9 歴史資料館運営委員会開催
村松高市氏(本学職員)より南條徳男元学長関係資料受贈 | 7. 30 自校史教育「現代の大学」⑩ |
| 6. 11 自校史教育「現代の大学」④ | 8. 22 石崎幹夫氏(本学職員)より資料受贈 |
| 6. 18 自校史教育「現代の大学」⑤ | 9. 13 全国大学史資料協議会全国研究会準備会参加
(於：武蔵野美術大学) |
| 6. 24 総務課所蔵資料(議事録決議録等)収蔵状況確認作業 | 9. 27 展示室入替準備作業 |
| | 9. 30 第11回企画展公開終了 |